

サッカー選手の〈パスの知〉の地平分析

寺田 進志¹⁾ 佐野 淳²⁾

Michiyuki Terada¹ and Atsushi Sano²: A phenomenological analysis of the “body wisdom of passing” in soccer players. *Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci.* 62: 169-186, June, 2017

Abstract : In soccer, passing has a decisive influence on the match, and can be said to be one of the game’s most important elements. Regardless of playing style, in order to win, soccer players must master the ability to deliver the ball accurately to teammates. Therefore, the training menu of coaches must ensure precise passing of the ball. Even if coaches teach this, the outcome depends on the skills of individual players. If it is possible to reduce the number of failed passes as far as possible, then a better strategy than the opposing team can be achieved. For this purpose, it is necessary to refine the “passing wisdom” of soccer players. As the importance of passing in soccer is widely recognized, a number of studies have addressed this aspect. For example, an attempt has been made to clarify the mechanical structure of the kick from a biomechanics perspective, and to clarify the structure of cognitive perception from a sports psychology perspective. However, to our knowledge, there has been no phenomenological analysis of “passing wisdom” in soccer players to date. In order to analyze this, a phenomenology (*Bewegungslehre des Sport*) perspective needs to be adopted, and this was done in the present study.

This revealed the following 7 abilities:

- 1) The ability to sense other players’ intention.
- 2) The ability to sense whether the criteria for successful action meet other players’ intention.
- 3) The ability to construct a situation based on one’s own analysis.
- 4) The ability to recognize the criteria for effective passing.
- 5) The ability to sense the receiver of the pass.
- 6) The ability to visualize the course of the pass.
- 7) The ability to apply the technique to a constructed situation based on one’s own analysis.

Key words : passer, the constructed situation based on one’s own analysis, sense of movement and behavior, phenomenological evidence, intersubjectivity

キーワード : 出し手, 情況, 動感, 現象学的エヴィデンス, 相互主観性

I. 緒 言

1. 〈パスの知〉の洗練化の必要性

パスの重要性について、チャナディ（1994, p. 322）はパス以上に試合に決定的影響を与えるも

のではないといい、大淵ほか編（1976）は、サッカーはパスゲームであり、サッカーで最も重要なことはパスであるという。実際に、試合のなかで選手はパスを多用していることから、パスの重要性を理解することは容易であると思われる。さらに、カウンターないしポゼッションといった、

1) 筑波大学大学院人間総合科学研究科
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1
2) 筑波大学体育系
〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1
連絡先 寺田進志

1. *Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba*
1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8574
2. *Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba*
1-1-1 Tennodai, Tsukuba, Ibaraki 305-8574
Corresponding author michiyuki.t@hotmail.co.jp

いわゆるサッカースタイルにかかわらず、試合に勝つために、選手にはボールを精確に味方につなぐ能力が必要不可欠となる。なぜなら、ドリブルで敵の選手を全員抜いていくことよりも、味方とボールをつなぎながら敵のゴールへ攻め込むことの方が有効であるといえるからである。

しかし、当然ではあるが、サッカーでは敵と味方が存在するため、味方にボールをつなぐことは決して容易なことではない。そのため、指導者は練習メニューを問わず、選手に対してパスの指導をしている。たとえば、ゲーム形式の練習でも、選手がパスミスをした場合、指導者はその選手に対して「今のタイミングでパスをするとボールを取られるぞ」といったように指導をするし、味方にパスが繋がったとしても、「グラウンダー（転がったボール）のパスならば味方がシュートまで行けたぞ」といったように指導をする。しかし、指導者がどれだけパス指導をしても、選手はパスを失敗せずに試合を終えることは極めて困難である。ただし、できる限りパスミスを少なくすることで敵の攻撃を回避することができるし、より多くシュート場面を創り出すためのパスをすることができれば得点の可能性が広がる。したがって、指導者は選手にパスの指導を行うことによって、選手の「パスの知」（寺田・佐野，2015，p. 33）を洗練させる必要がある。

なお、本研究における〈知〉は創発身体知に基づいている（寺田・佐野，2015，p. 33）。したがって、この場合の〈知〉は単なる知識ではなく、新しい出来事に対して適切に判断し解決できる身体の知恵が意味されている（金子，2005a，p. 2）。そのため、〈パスの知〉には運動の創発能力（金子，2002，p. 465）が含意されるのであり、「動かないし動きのかたちの発生（Genese der Bewegungsform）に関わる知」（佐野，1997，p. 51）ということもできる。それゆえ、〈パスの知〉には「私はできる」（フッサール，2009，pp. 101-113）が意味される。

2. 状況判断とは性格を異にする〈パスの知〉の研究

一般に、パスは蹴り方（技術）と判断（戦術）から成り立つと考えられ、特にパスの成功には判断が重要であるとされている。そのため、パスに関する研究は状況判断に関する研究が多いといえる。そして、この種の研究では選手の知覚・認知構造に関心が向けられている。

しかし、本研究では〈パスの知〉、言い換えれば〈パスができる〉ことが取り上げられる。この場合、われわれは、パスは蹴り方と判断から成り立つといった二元論的思考を、とりあえず「括弧入れ」（フッサール，1979）する必要がある。なぜなら、われわれは二元論的思考のまま研究を行うと、〈パスができる〉ことの根拠を知覚・認知に求めてしまうからである。つまり、「パスができたのはしっかり敵を見ていたからだ」、または「パスができないのは敵や味方を見ていないからだ」といったように、〈パスができる〉ことの要因ないし〈パスができない〉ことの原因を、知覚・認知の問題に還元させようとしてしまうからである。

しかし実際には、ノールックパスの例証が示すように、選手は敵や味方を見なくてもパスをすることができるし、試合では敵にパスコースやタイミングを悟られないようにしなければならない（多和ほか編，1997，p. 156）。そのため、パスしようと思う方向に目を向けたり、動いたりすると相手に読まれてしまうため、巧妙に偽装する必要がある（チャナディ，1994，p. 324）。また、ルイス（2015）は、パスを出す際にはプレーの意図を隠す必要があり、パスを出す方向に目を向けてはいけないという。つまり、指導現場では、〈パスができる〉ことは必ずしも知覚・認知に基づいているわけではないといえる。それゆえ、本研究では、指導者が現場で向き合っている問題、すなわちパスが〈できる〉といった問題をそのまま取り上げることになる。

3. 本研究の目的

本研究では、パスを〈知〉の問題として捉え、

〈パスの知〉を明らかにすることが試みられる。言い換えれば、「どうすればパスが〈できる〉のか」を明らかにすることになる。そのため、本研究ではパスをする主体を分析する必要がある。つまり、パスの主体である出し手はどんな意識ないしどんな感じでパスをしているのか、そして、その際に出し手にはどのような能力が働いているのかを明らかにする必要がある。

この場合、「本人がどう動こうとしているのかという感覚世界」（金子，2009，p. 11）が取り上げられることになる。もちろん、ここで取り上げられる感覚は「私の身体性のなかに息づいている〈動いている感じ〉」（金子，2005a，p. 24），すなわち「動感」（金子，2005a，pp. 304-305）のことである。

したがって、本研究では主体の感覚世界を明らかにすることができる「現象学的運動学」（金子，2015，p. 7）に立脚して、サッカー選手の〈パスの知〉を明らかにすることを目的とする。

II. 現象学的運動学における分析方法とその妥当性

1. 現象学的運動研究の学問的特性とエヴィデンス

すでに体育・スポーツの研究における現象学の有効性が検討され（遠藤，1979），スポーツ運動研究の世界で現象学的運動研究が台頭している昨今でも、どうしても現象学的運動研究は〈非科学〉であるという認識が払拭されない。岸野（1980，p. 86）によれば、「Scienceの語源となったラテン語のScientiaは、Wissenschaftが人文・自然の広いWissen（知識）を原意としたように、広く知識ならびに知識の体系として理解されている」という。また、高岡（1976，p. 188）も、科学あるいは学と呼ばれるものは統一的体系的な知識であるという。それゆえ、現象学的運動学は広義の〈科学〉に属することになる。

現象学的運動学では、人間の運動は「一回性の原理」（金子，1994，p. 453）に支配されているという運動認識を持ち、反実証主義的性格を有す

（佐野，2014）とされている。そのため、この学問的立場に立脚する研究では反証可能性は確保されようがない。したがって、別の方法によってエヴィデンスが保証されることになる。

一回性の原理に基づく運動認識の下では、客観的には同一の運動は存在しないと考えられている。そのため、エヴィデンスを確保するためには「私の意識体験」（西，2015，p. 122）を〈反省〉する必要があるといえる。

現象学的方法について、フッサール（1984）は、徹頭徹尾、反省の諸作用のなかで行われるという。ここで意味する反省は、「もとの体験を反復することではなく、それを観察し、そのうちに見出されるものを解明すること」（フッサール，2001，p. 71）であるとされる。つまり、これまでの経験を観察することによって、そこから本質を解明することであるといえる。そして、「自分の体験を反省してみると『確かにこうなっている・そうとしかいえない』ということ」、すなわち「体験反省のもつ確実性ないし不可疑性」がエヴィデンス（明証性）なのである（西，2015，p. 124）。それゆえ、現象学的運動学におけるエヴィデンスは現象学的反省によって保証されるのである。

2. 現象学的反省の妥当性の検討

現象学的反省と呼ばれる「自我論の徹底が相互主観性にほかならない」（隈元，2007，p. iv）のであり、「相互主観性は自我の経験構造の徹底的開明を通してのみ開示することができる」（ザハヴィ，2003，p. 186）とされている。言い換えれば、現象学的反省を徹底する、すなわち〈私〉の経験を徹底的に掘り下げることによって、〈私〉だけではなく〈あなた〉も〈そう感じる〉ことへと到達することができ、〈われわれ〉の理解を得ることができるとされている。そして、この〈われわれの理解〉は〈相互主観性の獲得〉であるとされるのである。

われわれには、幼児期に「前交通」と呼ばれる発達の第1段階があり（メルロ＝ポンティ，1966），ここでは自我がまだ他者との諸関係のな

かに溶け込んだままになっている〈情緒の共生状態〉にある(ワロン, 1983). これは自他未分の状態を意味するのであり, 「先-自我」(フッサール, 2012)の領域のことである. この「先自我は, 自他の区別を知らない匿名的身体性を生き, 〈私〉と〈あなた〉の共通の同じ根源となっている(山口, 2002, p. 230).

そして極めて重要なことは, 成人になっても自他の身体性の未分化な匿名の間身体性が働いている(山口, 2002, p. 233)ということである. すなわち, フッサール(2013, p. 26)が「他者の身体は, なるほどある種の原本性において私に与えられている」というように, われわれは〈私〉の固有領域をもちながらも〈他者〉との共通領域をすでに有しているのである. 現象学的反省の徹底によって, われわれは相互主観性の領域に到達することが可能となると考えられているのである. それゆえ, 相互主観性によって現象学的反省の妥当性が保証されるといえるのである.

3. 現象学的反省に基づく分析方法としての地平分析

「方法(method)という言葉はギリシャ語(meta+hodos)に由来し, 字義はあるものへ至る道ということであり, ある目的を達するためのやり方とか行動の仕方」(高岡, 1976, p. 244)が意味される. そのため, それぞれの個別科学における方法は, その対象や内容により違いが生じるのであって, 対象や内容に無関係にあらかじめ用意された方法が外部からおしつけられてはならない(高岡, 1976, p. 244). したがって, 現象学的運動研究と自然科学的運動研究は「到達すべき目標がまったく異なっているので, そこに達する道筋(方法)も違わざるをえない」(朝岡, 1991, p. 7)のであり, 「どちらがより有効で, どちらが正当性をもつかに関しては, 分析対象に何を求めるかの問題意識によって決められる」(金子, 2009, p. 13)ことになる.

本研究では, サッカー選手の〈パスの知〉が分析対象となる. そのため, サッカー選手の意識や動感を分析することになる. もちろん, ここで意

味する「意識とは, 原初的には〈われ惟う〉ではなくて〈われ能う〉である」(メルロ=ポンティ, 1967). したがって, 意識には能力性が含意されることになる.

パスをする際には, 出し手には「〇〇にパスをする」といった意識が働いている. もちろん, このような意識は自覚されることもあれば, 無自覚の場合もある. ただ, いずれの場合であっても現象学的運動学では「〇〇にパスをする」といった意識作用によって, その瞬間のパスが〈できる〉と考えられている. しかし, 未経験者は「〇〇にパスをする」といった意識によってボールを蹴っても, 味方にボールがつかないことは多々ある. なぜなら, 運動している際には, 「主題的に注意を向けられてはいないが, 『非主題的』に意識されているような経験が働いている」(田口, 2014, p. 51)のであり, その非主題的な意識が現前の動きを支えているからである.

たとえばわれわれが歩く場合, 「右脚を前に振り出し, 右脚で地面を支持して, 左脚を前に振り出して…」といったように, 身体の使い方を自覚しなくても歩くことが〈できる〉のは, 身体の使用方に対する意識が潜在的に働いているからであるといえるのである. このように, 顕在的意識だけではなく, 潜在的意識によって〈できる〉ことが支えられているのである. この潜在的意識の世界は地平ないし「あらかじめ描かれた潜在性」といわれている(フッサール, 2001, p. 88).

地平を分析することの重要性として, フッサールは, それぞれの瞬間に顕在的に思念されたものとして現前しているものより多くのものが潜在的に思念されているといい(フッサール, 2001, p. 91), さらにすべての顕在性には潜在性が含まれているのであり, この「潜在性とは, 空虚な可能性ではなく, 内容的に, しかもそのつどの顕在的な体験そのものうちで, 志向的に粗描された可能性, そのうえ, 自我によって実現されうる可能性という性格を備えている」(フッサール, 2001, p. 87)という. つまり, 「パスをする」といった顕在的意識には潜在的意識がすでに含まれ, その潜在的意識は多様であり, それらが〈パスができ

る〉ことを支えているということである。したがって、〈パスができる〉ことを明らかにするためには、出し手の地平を分析することが必要になる。そして、そのための分析方法として「地平分析」(金子, 2007, pp. 66-69) と呼ばれる方法を採用することが適切であると考えられる。

地平分析は、フットサルの志向的分析に依拠する(金子, 2005b, p. 136)。そのため、「意識の顕在性のうちに含まれている潜在性を露呈すること」(フットサル, 2001, p. 91) が、地平分析のねらいとなる。われわれは「動感深層の地平構造のもつ志向体験に問いかけ」(金子, 2007, p. 247) ることによって、「動感力の含意潜在態を背景に隠している地平志向構造」(金子, 2007, p. 261) を明らかにすることができるとされているのである。

Ⅲ. パスと〈情況〉の関係に関する考察

1. 現象学的運動学で意味する〈情況〉

ポイテンディク (1995, p. 30) によれば、「動物の活動の意味は、世界の構造的部分の意味内実との関連においてはじめて開示されるのであって、そのような部分をわれわれは情況と名づける」としている。また、ポイテンディク (1995, p. 43) は人間の運動が有意な行為として理解されるのであれば、情況もそれがもつ意味において、しかも行動する主体に対してもつ意味において理解されなければならないとしている。したがって、情況は単に即自的に存在している物体の位置関係ではなく、主体が有する意味の関係であると理解される。

「人間にとってのこの世界(生きた空間)は即自的に与えられているのではなく、知覚と運動によってまず構成され、そして断えず変形、再構成され、そして逆にまた人間存在を規制しもするようなものである」(加藤, 1981, p. 27)。そのため、情況は誰にとっても同一な世界として存在することはない。主体がどのように世界を構成し、変形させ、再構成させるかによって、世界の現れかたは変化するのである。情況に溶け込む「それ

ぞれの主体にとってみれば、そこに『現実』に存在しているのは、その主体が主観的に作りあげた世界」(日高, 2005, pp. 163-164)なのである。

したがって、情況の概念では主体と意味を排除することはできない。また、ここで意味する主体は「自己自身の力で自己自身の関係において動作を行う存在」(ヴァイツゼッカー, 1995a, p. 31)であり、この主体の「行動は〈関係〉からなる」(メルロ＝ポンティ, 1964, p. 191)とされている。それゆえ、生きものの運動の意味と世界に構造化されている意味内容との「〈関係〉(Verhältnis = Sich-verhalten)こそ〈情況〉」(金子, 2002, p. 500) と呼ばれるのである。かくして、〈情況〉とは主体が世界との関わり合いのなかで構成する意味系・価値系の構造といえることができるのである。

2. プレー中の選手にとっての情況

これまでに、現象学的運動学における情況が明確にされた。上述された情況の概念に基づいて、ここでは選手の意識対象を明確にする。そうすることによって、主体である選手はどのように情況を構成するかの手がかりを得ることができる。なお、ここで意味する〈構成〉は、「意識作用を通して意識内容ができあがっていること」(山口, 2002, p. 26) が意味される。

(1) ピッチ情況における意識対象

われわれは、まずピッチ情況と呼べる関係構造を取り上げなければならない。選手にとって、もっとも身近な情況はピッチと呼ばれる時空間であるといえるからである。そして、このピッチ情況が最も選手に差し迫るからである。もちろん、ピッチとは白線で区切られた「競技空間」(金子, 2009, pp. 117-118) のことである。この競技空間内で選手はプレーする。そのため、ピッチ内の意識対象を明確にすることによって、選手がどのような対象からピッチ情況を構成するのかを明確にすることができると考えられる。なお、一般にはピッチとグラウンドは同義であるといえるが、本研究ではピッチを〈競技空間〉とする。一方で、

グラウンドを競技空間内における選手がプレーする地面として捉えることにする。

まず、選手の意識対象としてグラウンドをあげることができよう。実際に、グラウンド状態がパスに影響を与える（チャナディ、1994, p. 328）からである。さらに、その日の天候もパスに影響を与える。そのため、天候によってパスを変えなければならない（チャナディ、1994, p. 328）。この他に、多和ほか編（1997, p. 72）は「ボールの位置、敵味方の選手の位置だけは四六時中見て知っておかなくてはならない」という。また、ルイス（2015）は、素晴らしいパスを通したいのであれば、味方の動きの把握、敵がボール、マーク、スペースなどのうち何に意識を向けているのかを見極める必要があるという。

したがって、プレー中の選手にとって、グラウンド状態、天候、ボール、敵、味方、スペースを意識対象として考えることができる。パスをする際、出し手はこれらの対象を感じるによって、ピッチ状況を構成しているといえるのである。

(2) 試合状況における意識対象

次に、われわれは試合状況を取り上げる必要がある。ここでの試合状況は、当該試合のありさまということができる。そのため、試合状況にはピッチ状況も含まれることになる。ピッチ上に存在する選手は、当然、当該試合のなかにも存在しているということである。したがって、ここではピッチ状況以外の意識対象が明確にされる。

まず、試合状況の意識対象として経過時間をあげることができる。試合開始10分後と試合終了10分前では選手に与える影響は異なる。さらに、そこには得点差も関連している。試合終了10分前、0対1で負けている場合、得点を取りに行くことを目指してプレーすることになる。ただし、敵チームに追加点を奪われれば同点にすることさえ危うくなるので、その危険性を回避しながらプレーする必要がある。

次に、自チームの戦い方ならびに敵チームの戦い方を取り上げることができよう。たとえば試合終了10分前、1対0でリードしている場合に、敵

が猛攻を仕掛けてきているならば、まずは失点をしないことを優先させながら敵が攻撃に人数をかけて来る裏を突き、カウンターによって追加点を奪いに行くことを狙うことができる。

さらに、チームの戦い方は戦略と関連づけられる。戦略の立案にあたって、大会形式と試合形式が考慮される必要がある。つまり、この大会はリーグ戦なのか、それともトーナメントなのかはチーム戦術に直接影響を与える。さらに、リーグ戦であれば現在のチームの順位が考慮されることになるし、トーナメントであれば何回戦なのかを考慮されることになる。一方で、試合形式では、グラウンドの大きさ、延長戦およびPK戦の有無が意識対象となる。

したがって、試合状況における意識対象として、経過時間、得点差、チームの戦い方および戦略、大会形式、試合形式をあげることができる。ピッチ状況を感じることも同様に、出し手は試合状況を感じるによってパスをするといえる。

(3) パスと状況の関係

選手はピッチ状況と試合状況の意識対象を構成しながらプレーしている。「残り時間は10分で、0対1で負けている。敵チームは守備を固めてきているな。私たちのチームはサイドからの攻撃を得意としているからサイドにボールを集めよう。右サイドハーフの味方ならば敵の左サイドバックを突破することができるだろう。だから右サイドの味方にパスしよう」といったように、出し手は状況との関わりのなかでパスをするのである。もちろん、このような論理構造はプレーの地平に隠れている。したがって、パスをする瞬間に出し手には論理構造は自覚されない。

ただし、一般には、たとえば敵のプレッシャーを感じることなくボールを保持している場合、いつ、どこに、どのようなパスをするのかといったことを考える時間はあると考えられている。つまり、出し手は上述したような論理構造を自覚していると考えられているといえる。しかし、ここで意味する考える時間とは、たとえばパソコンを目の前にして文章を論理的に考える時間といった意

味ではない。

パスをする際に、出し手は対象（敵味方など）を知覚する。しかし、たとえば味方を知覚して、「味方が左へ移動した」といったような客観的な出来事を論理的に考えて、その論理的思考に導かれてパスをするわけではない。出し手は対象を知覚しながらパスをするのである。

ヴァイツゼッカー（1995a, p. 42）は身体と状況との結合性を「相即 Kohärenz」と呼び、知覚と運動の全体を一つの行為とみなすことが正しいという。すなわち、「われわれの行為としての運動は、どんなときでもその知覚と運動は固く絡み合っている」（金子，2002, p. 341）と考えるべきなのである。試合中に、出し手がプレッシャーを感じることなく、ある程度余裕をもってパスをする際には、考える時間があるのではなく、厳密には切迫性が低いと考えるべきであろう。つまり、すぐにパスを出さなければならない状況ではないということであり、客観的な出来事を論理的に考える時間があることを意味しない。したがって、一般にいわれる「考える時間」というのは「切迫性の低い状況」を意味すると考えるべきである。

また、試合中に出し手がその状況を意識することなくパスをしたとしても、そこではその出し手には無自覚に新たな意味が発生してしまう。たとえば敵のプレッシャーをほとんど感じていないセンターバックが自陣ペナルティーエリア付近に位置する味方ゴールキーパーにバックパスをした場合、そのセンターバックのパスによって、敵は「ディフェンスラインを押し上げることができる」あるいは「守備陣形を整え直す時間ができる」といった意味が発生してしまう。メルロ＝ポンティ（1964, p. 184）が「行動そのものが〈意味〉なので〈ある〉」というように、出し手が状況を意識せずにパスをしたとしても、そのパスが新たな意味を発生させてしまうのである。

このように、1本のパスは状況を一変させ、状況は1本のパスに影響を与える。すなわち、状況とパスは常に関わり合っているのである。そして、いつ、どこに、どのようなパスをするのか

は、出し手がその状況をどのように構成しているのかに関わっているのである。

Ⅳ. 〈パスの知〉の地平分析

これまでに、パスと状況の関係が明確にされた。以下では、これまでの考察に基づいて、サッカー選手がパスをする際に、どのような能力を働かせているのかを分析していく。

1. サッカー選手に不可欠な根源的な〈知〉の分析

サッカーは「直接的な対人構造」（金子，2005a, p. 255）を形成している。そのため、否が応でも敵、味方の影響を受けざるを得ない。選手は自覚的、無自覚的に他者の影響を感じてしまうのである。ボールを保持している場合、ボールを保持していない場合、いずれの場合にも他者の影響を受けることになる。もちろん、選手は他者の影響を受けるだけではなく、他者に影響を与えることになる。

したがって、パス、シュート、ドリブルなど、すべてのプレーは他者の影響を受けながら生じているといえる。そのため、パス、シュート、ドリブルなどは、それぞれ独自の〈知〉が働いてはいるものの、そこには共通する〈知〉が存在していると考えられる。そこで、ここではすべてのプレーの根源となる〈知〉を明らかにする。

(1) 他者の〈知〉を感じる能力

たとえば縦パスを入れようとした際に、出し手と受け手を結んだ線上に敵が存在するならば、出し手は敵にパスカットをされると感じてその味方にパスをしないであろう。しかし、敵は出し手と受け手を結んだ線の中に位置し、その線上から2, 3歩ほど左に位置していたならば、出し手はその味方に対してパスをするかもしれない。

ただし、その味方に対してパスをするか否かはその敵の能力にも依る。このような場合、出し手は敵の意図や能力を感じる必要がある。つまり、出し手は「パスカットを狙っていて、わざとその

パスコースを空けているのか」、「別の選手を意識しているのか」、「疲れていてパスコースを塞げないのか」といったことを、敵から感じる必要がある。

もちろんこのような場合、パスをするか否かは受け手となる味方の能力にも依る。そのため、出し手は味方の意図や能力を感じる必要がある。つまり、出し手は「パスをもらおうとしていないな」、「シュートを打つためにパスをもらおうとしているな」、「敵にボールを取られないように強いパスをしても、あいつならしっかりボールを止めてシュートを打てるな」といったことを、味方から感じる必要がある。

出し手は、その状況において、敵と味方、つまり他者が「何をしようとしているのか」といった意図や「何ができそうなのか」といった能力を感じる必要がある。すなわち、出し手は他者の〈知〉を感じる必要がある。この〈知〉は〈できる〉と軌を一にするため、「他者の〈知〉を感じる」とは、「他者は何が〈できる〉のかを感じる」と言い換えることもできる。一般には「〈知〉を感じる」といった表現はされない。しかし、たとえば指導者が選手に対して、「敵は何をしようとしているのか、また、何ができそうなのかを感じる必要がある」ということがある。「〈知〉を感じる」という表現は、まさにこのような事象・現象を表しているのである。

他者の〈知〉を感じるためには、他者に志向性に向ける必要がある。そして、志向性には「能動的志向性」（山口，2002，p. 114）と「受動的志向性」（山口，2002，p. 114）があると考えられている。能動的志向性とは、いわば自覚的に対象を意識しているということができる。たとえば「その敵は何をしようとしているのか」といったことを自覚しながら、その敵の〈知〉を感じ取っているということである。一方で、受動的志向性とは、無自覚的に対象を意識してしまっているということができる。たとえば、「その敵は何をしようとしているのか」といったことを意図的に探らなくても、「敵がシュートを打つ」と感じてしまうのは、受動的志向性によると考えられるので

ある。

意識作用と意識内容はいつも必ず一体である（谷，2002，p. 135）。そのため、たとえば出し手が次の状況を考えながらパスをすることができるのは、ボールを蹴ることが自動化され、さらにその際には対峙する敵の〈知〉や受け手となる味方の〈知〉が無自覚的に感じられているからであるといえる。なぜなら、この場合、出し手にとっての意識作用は、いわば「次の状況を考えること」であり、一方の意識内容は意識作用を通して構成された「次の状況」であるといえるからである。

選手が他者の〈知〉を感じられるといえるが、試合中に選手は受動的志向性によって他者を感じてしまっているからであるといえる。つまり、「もし私があの敵だったら…」、「もし私があの味方だったら…」といったように、自己を目の前の他者（敵，味方）に置き換えることによって、他者の〈知〉を類推しているからであるといえる。フッサール（2001，p. 206）によれば、「他者は、現象学的には私の自己の『変様』として現れる」という。したがって、「私が守備者ならば…するな」、「私が受け手だったら…するな」といったように、自己を他者に置き換えることによって、敵，味方の能力を類推することができると考えられるのである。

このように、選手が他者の〈知〉を感じることができるのは、「対化」（フッサール，2001，pp. 201-204）が生じているからであるといえる。この対化は「受動的綜合の一つの根源的形式」（フッサール，2001，p. 202）とされている。そのため、選手は敵の意図や能力を論理的に考えるのではなく、すでに無自覚に他者が感じられているといえる。たとえば敵との接触によって流血してしまったり味方がいた場合、とっさに「痛そう」と感じてしまうのは、その瞬間にまさに、あたかも〈私〉が〈あなた〉のようになってしまうからである。選手は『『対化（Paarung）』という受動的綜合の働きを通して、相手の意識、とりわけ身体感覚を共感』（山口，2009，p. 153）してしまうのである。対化によって「私の現実的な可能性」（フッサール，2015）として、われわれは他者の

〈知〉を感じることができると考えられるのである。

しかし、サッカー未経験者の場合、他者の〈知〉を感じる能力が洗練されていないため、試合中に他者の〈知〉を感じることができないといえる。そもそもサッカー未経験者は他者の存在を主題化できないため、他者の〈知〉を感じる事が主題化されないといえる。なぜなら、たとえば小学校低学年の子どもたちがサッカーをする場合、自分がしたいこと（たとえば、ドリブルやボールを奪うことなど）のみが意識されるといえるからである。しかし、子どもがサッカーをする場合でも対人構造は形成されている。そのため、無自覚に子どもには他者が意識されてしまっているといえる。つまり、子どもたちには「敵がそこにいる」、「味方がそこにいる」といったことが無自覚に意識されてはいるものの、その敵や味方の〈知〉を感じるということにはいたらないということである。

ただし、子ども、あるいはサッカー未経験者は他者と対になることができないわけではないと考えられる。たとえば、友達が転んで膝に擦り傷ができ、そこから血が出ているのを目にして「痛そう」と感じてしまうのは、まさに怪我をした友達と対になっているからである。したがって、指導者はサッカー選手が有する根源的な〈知〉としての他者の〈知〉を感じる能力を洗練させる必要があるといえる。

(2) 自己の〈知〉を感じる能力

試合中、選手は常に決断に迫られている。緊迫したゴール前でボールを保持している場合、躊躇しては敵にパスコースを塞がれたり、シュートブロックに入られたり、ボールを奪われたりしてしまう。敵のプレッシャーを感じない状況においてボールを保持している場合でさえ、いつ、どこに、どのようなパスをすればよいのか、といった決断に迫られている。

しかし、その状況においてどのようなプレーが良く、どのようなプレーが良くないのかを決めることは極めて困難である。たとえば敵陣ペナル

ティーエリア付近でボールを保持している場合、シュートを打つべきなのか、敵の裏へ走り出した味方にパスをすべきなのか、あるいはドリブルをすべきなのか、といった決断に迫られる。そして、この状況においてボール保持者がシュートをして得点を奪うことができれば良いプレーとなるし、パスを受けた味方が得点を奪うことができても良いプレーとなる。

サッカーのプレーに正解はない。もし、どのようなプレーが良いのか、言い換えれば良い結果を得られる過程がすでにわかっているのであれば試合は成り立たない。「運動はすべて情動的な運動」(ヴァイツェッカー, 2010, p. 50) なのであり、それゆえ運動は「パトスのカテゴリー」(ヴァイツェッカー, 2010, p. 86), すなわち〈したい/意志〉〈できる/可能〉〈してよい/許可〉〈すべきである/義務〉〈せねばならない/必然〉の葛藤から生じるのである。

ただし、パトスのカテゴリーに否定の領域も含める必要があると考えられる。試合では、他者との関係系が形成されているため、「…できない」といったことが必ず生じるからである。実際に、状況によって選手は「そんなプレーは俺にはできないから今のプレーをしたんだ」といったことをいうこともあるし、味方ゴールキーパーのそばに敵がいる場合、ゴールキーパーにパスをしてはならないということもある。つまり、状況によっては「…できないから～をする」といったように、否定から運動が生じることもあるといえる。したがって、ヴァイツェッカーのパトスのカテゴリーを肯定的パトスのカテゴリーとし、その裏には常に否定の領域があり、それを否定的パトスのカテゴリーと呼ぶことができよう。そして、選手は肯定と否定の領域から成る〈二重のパトスのカテゴリー〉の葛藤からプレーを生じさせているといえることができる。

決断の基盤にはパトスのカテゴリーがあり、さらにサッカーでは、パトスのカテゴリーと状況との関わりのなかで選手は決断に迫られることになる。たとえば試合時間残り5分、0対1で負けている場合には、同点に追いつくためになるべく早

く前線へパスをすべきである。そして、パトスのカテゴリーのなかで葛藤しながら決断する際には、1つの確信が成立していると考えらるべきであろう。つまり、もちろん状況によってプレーはある程度限定されることもあるが、ほぼ無限の可能性のなかからそのプレーを発生させるためには、その選手が「そうすることが良い」ないし「そうすることができる」といった確信を抱くからに他ならないからであるといえる。

たとえば上述した1点ビハインドの試合状況において、行為を発生させる前の可能性の問題として、ドリブルをすることも適当かもしれないし、前線へパスをする場合でもボールを浮かせて遠くへパスをするのか、グラウンダーのボールによってパスをするのかといった可能性が考えられる。サッカーには正解はないからこそ、ほぼ無限の可能性を考えることができるのである。

試合では、何らかの行為を発生させる必要がある。上述の例では、何らかの行為、しかも試合に勝つための効果的な行為を発生させなければ負けてしまうからである。パスをするにしても、ドリブルをするにしても、そうすることによって状況がより良くなるのが、顕在的意識ないし潜在的意識によって描かれ、その選手にはそのような状況になることが自覚的、無自覚的に固く信じられていると考えるべきであろう。そのため、決断とパトスのカテゴリーの間には「そうすることが良い」ないし「そうすることができる」という確信が存在していると考えらるべきであろう。ただし、ここで意味する間は、ヴァルデンフェルス(2004, p. 310)が間身体性の問題として、あるAとあるBが存在して、それら両者の間に中間領域が存在することではないと注意喚起するように、行為の決断とパトスのカテゴリーの間に確信が存在しているわけではない。決断、確信、パトスのカテゴリーは1つのまとまりとして存在しているのである。

選手は葛藤しながら決断するのではあるが、その決断をする際には「そうすることが良い」ないし「そうすることができる」といった確信を抱いているからであるといえる。もちろん、「くパスが

つながる感じの確信の度合い」が存在する」(寺田・佐野, 2015, p. 48)とされているように、プレーの確信の度合いも存在するといえる。つまり、選手は「このプレーが絶対に良い」、「このプレーが良いだろう」、また、「絶対にできる」、「たぶんできる」、「できないかもしれない」、「できないかな」といったように、プレーの良し悪し、「できる」ないし「できない」には度合いが存在するといえる。しかし、そう葛藤しながらも、そのプレーを発生させるということは、「…できないかもしれない。でも、できるかもしれないからやってみよう」といったように、「そうすることが良い」ないし「そうすることができる」といった確信を少なからず抱いているということである。

プレーにおける確信を明らかにするために、内在的知覚と超越的知覚を取り上げる必要があると考えられる。ここで意味する内在とは「主体の〈内〉に〈在る〉」こと、超越とは「主体を〈越えて〉在る」ことを表し、字義通り理解して差し支えないであろう。そのため、内在的知覚とは、「感覚のような直接的な体験」(山口, 2002, p. 47)、換言すれば「主体が感じる」ということができる。一方で超越的知覚とは、「外に在るとされるものの知覚」(山口, 2002, p. 47)、換言すれば「主体が事物の存在を知ること」ということができる。

フッサー(1979, pp. 196-202)によれば、内在的知覚には疑わしさがなく、超越的知覚は疑わしさがあるという。この考えに基づけば、たとえば味方にパスをする場合、「その味方にボールをつなぐことができる」と出し手が「そう感じる」とは出し手にとっては疑いようがない。したがって、出し手が「そう感じる」とは内在ということになる。一方で、「存在=超越である」(谷, 2002, p. 50)とされていることから、味方は超越ということが出来る。たとえば、その味方が右へ動いたことを知覚する場合、出し手は味方のその動きはボールをもらうための動きなのか、他の味方へのパスコースを創るための動きなのかといったことに関して疑いの余地を残すことになる。

そして、選手が「そう感じる」のは、その選手が「受動的確信」(フッサール, 1977, p. 23)をもっているからであると考えられる。フッサール(1977, p. 21)は「認識運動の開始以前に、われわれは『信じられた対象』をもち、それを端的に確信をもって信じている」という。つまりプレー中、選手は何らかの〈信じられた対象〉をすでに持っているからこそ、その選手には不可疑な「そう感じる」ことが生じると考えられる。

では、〈信じられた対象〉とは何か、ということが問題にされるが、これは不可疑な内在と同様に「主体の〈内〉に〈在る〉」何らかであると考えべきであろう。そうすると、運動が〈できる〉のはそのための能力、すなわち〈知〉を、主体が有しているからに他ならない。これまでの「練習を通して実践的な〈力量 Können〉が生じる」(フッサール, 2009, p. 184)のであり、その力量は「身体的経験」(川瀬, 2010, p. 2)として血肉化される。つまり、日々のトレーニングを通して、状況との関わりのなかで、何ができて、何ができないのか、また何をすべきで、何をしてはならないのかといったことを、選手は自覚的、無自覚的に身体知に蓄積させているのである。したがって、自己の〈知〉が〈信じられた対象〉ということになり、自己の〈知〉に対する確信によってプレーが生み出されると考えられるのである。

2. パスを実現させる固有な〈知〉の分析

現象学的運動学では、運動を実現するために2つの意識作用が関わっているとされている。1つは「身体中心化作用」(金子, 2015, pp. 30-32)であり、もう1つは「状況投射化作用」(金子, 2015, pp. 33-35)である。前者は「自分の身体に対して意識を向ける作用」、後者は「状況に対して意識を向ける作用」と言い換えることができる。

2つの意識作用は相互隠蔽原理に支配されていて、一方が働くとは他方は背景に身を隠して息づいているという同時反転性をもつ(金子, 2015, p. 51)。たとえば蹴り方を習得する際に自分の身体

を意識すると状況投射化作用は隠れ、パスをする際に状況を意識すると身体中心化作用は隠れるということである。状況に対して意識を向けながらもボールを蹴ることができるのは、ボールを蹴ることが「自動化」(マイネル, 1994)されているからである。

パスは状況と常に関わり合っている。そのため、出し手は状況をどのように感じているのかが極めて重要になる。したがって以下では、パスをする際の状況投射化作用に焦点を当てて、〈パスの知〉を機能させるための能力を明らかにする。

(1) 次の状況を構成する能力

パスによって新たな意味が発生する。出し手が何らかの狙いをもって味方にパスをする場合はもちろん、結果的にパスになってしまう場合でさえ、その行為が新たな意味を発生させてしまうのである。したがって、出し手は自身の行為の意味をしっかりと考えてパスをする必要がある。

明確な意味を担ったパスの典型として、スルーパスをあげることができよう。スルーパスには、「好機を演出するため」のパスといった意味が含意されている。そのため、スルーパスを出す前に、出し手にはパスをした後の「好機」が予め描かれているといえる。予め好機が描かれているとはいえ、味方からボールを受ける前に、すでに好機が描かれていて、それを実現させるために味方からパスを呼び込み、パスを受けてからスルーパスをする場合もあれば、パスを受けた瞬間にとっさに好機が描かれる場合もある。とっさに好機が描かれてしまうのは、ボールを受ける前には別のところにパスをしようとして味方からボールを呼び込んだとしても、自分のところにボールが来るまでのほんの僅かの間に、自分が予想していた状況よりも、スルーパスを出しやすい状況に変化していることを感じられるためである。

当然、どのような状況を描くことができるのかは自己の〈知〉に依るといえる。たとえばゴールキーパーが自陣ペナルティーエリア付近から敵のディフェンスラインを越えるようなロングパスをした場合、そのゴールキーパーには敵のディフェ

ンスラインの位置、味方フォワードの能力、さらに自身の能力（どれくらい遠くまで正確にボールを届けることができるのか）などが感じられ、ロングパスの後に「味方が敵のディフェンスラインを突破していること」が描かれているからであるといえる。

また、「今の状況がどうなっているのか」ということも関係している。上記の例の場合、たとえばトーナメント戦で、延長に突入し、試合時間が残り5分を切り、0対1で負けているならば、なるべく早く前線へボールを届けることが描かれてしまうであろう。しかし一方で、勝っているチームのゴールキーパーが同様にボールを保持しているならば、急いで前線にボールを届ける必要はなく、そばの味方にパスをするであろう。

したがって、次の状況を構成するためには「今の状況がどうなっているのか」、また「これまでの状況はどうだったのか」を感じる必要がある。そのため、試合状況を把握する能力、すなわち状況把握能力が必要になる。もちろん、ここで意味する状況把握能力は「状況の意味構造を生身で生き生きと感じ取れる能力」（金子，2002，p. 505）のことである。

この意味構造とは、主体が存在（敵味方）や状況に対して「何のために」または「なぜ」といった問いかけから導かれた意味の関係ということができよう。上記の負けているチームの例に従えば、「なぜ」味方フォワードはディフェンスラインの裏へ走り出したのか、といった問いかけに対して、その理由を即座に感じることでありといえる。この場合、当然「早く攻めたい」といった理由が導き出される。つまり、「味方フォワードの動き＝早く攻めたい」といった関係が導かれ、それを実現させるためにロングパスをするということである。

また一般に、「同じ絵を描く」ないし「イメージの共有」と呼ばれる現象は、構成された状況の合致を意味するといえる。連係プレーを成功させるためには、出し手と受け手の構成された状況の合致が不可欠である。そして状況を合致させるためには、そもそも出し手も受け手も次の状況を構

成しておく必要がある。そのため、状況の構成は出し手だけの問題にとどまることなく、受け手、つまり味方との関係の問題へと発展していくといえる。〈パスの知〉の洗練化の問題と関連させれば、指導者は、出し手がどのような状況を構成していたのか、という問題を取り上げるのと同時に、味方はどのような状況を構成していたのか、という問題を取り上げることによって、出し手と受け手が構成する状況を合致させられるようにする必要がある。

以上のように、出し手は把握された状況を基にして、次にどんな状況にしたいのか、どんな状況にできそうなのか、どんな状況になりそうなのか、どんな状況になってしまうのか、あるいはこんな状況になってしまうな、こんな状況にせざるを得ないな、こんな状況にできそうだな、こんな状況になるだろう、といったことを〈構成〉する必要がある。

(2) パスをするのが効果的であると感ずる能力

ボールを保持している場合、ボール保持者はパス以外にドリブルとシュートをすることができる可能性を有している。したがって、ボール保持者はパス、ドリブル、シュートのいずれかを生み出すための決断に迫られている。もちろん、状況との関わりを無視することはできず、決断にはその状況も関係している。

状況と関わりながら、パス、ドリブル、シュートのいずれかを生み出すための1つの基準として、試合に勝つために効果的か否かをあげることができよう。そもそも、試合では敵チームに勝つことが最大の目的になる。勝つためには敵チームより多く得点を取り、失点を防ぐ必要がある。そして、試合に勝つための効果的なプレーをすることが選手には求められる。

たとえば敵陣ペナルティーエリア内、ゴール中央より右寄りの位置でボールを保持している選手がゴールほぼ中央にいる選手へパスした場合、パスをした選手は「味方にパスをすることによって得点を取ることができる」といった感じが生じた

からであるといえる。この場合、ボール保持者は敵のゴールのそばに位置しているため、シュートをするのを決断する可能性も大いにある。しかしその瞬間に、「味方と自分のどちらがシュートした方が得点を取れるのか」といったように、味方の〈知〉と自己の〈知〉を感じることによって、その選手は得点を取るためには「パスの方が良い」、「パスの方が効果的だ」と感じたからパスをしたといえる。

パスをする場合には、当然、パスに関する意識が生じている。上記の例では、「中央に位置する味方にボールをつなぐ」といった意識が生じているといえる。ただし、その地平では「シュートよりもパスの方が効果的だ」といった感じが生じているといえるのである。別の状況でも、「〇〇より△△の方が効果的だ」といった感じが生じているといえる。

たとえばハーフウェイラインより後方の自陣で、センターバックが敵のプレッシャーをほとんど感じない状況でボールを保持している場合、そのセンターバックはドリブルで前進することもできるし、前線ないし左右へパスをすることもできるとする。もちろん、敵のゴールキーパーの位置によってはシュートをすることができる可能性も生じる。そして試合状況は、前半20分を経過して0対0だとする。この状況に対して、「同点だし、焦ることはない」、「これまでボールを保持することができているからショートパスをつなぐことによって敵のゴールまで向かおう」といったことが感じられるならば、たとえば右サイドバックの選手にパスをするかもしれない。この際に、センターバックの選手には「ドリブルよりもパスの方が効果的である」と感じられているといえる。もちろん、このような感じをプレー中に自覚している場合もあれば、無自覚の場合もある。

ボールを保持している場合には、パス、ドリブル、シュートいずれかを生み出すための決断に迫られている。そして、どのような行為を生み出すのかは、「効果的か否か」という1つの基準に基づいているといえる。選手は、その瞬間さらにはその後、状況がより良くなるようなプレーを生み

出す必要がある。したがって、パスを成功させるためには、ボール保持者は即座にパスによる効果を感じ、それと同時にパスをすることができなければならないといえるのである。

(3) 味方を受け手として感じる能力

われわれは出し手から受け手へボールをつなぐ行為をパスと呼んでいる。そして、出し手と受け手の関係、言い換えれば「実践的な意志の共同体」(フッサール, 2013, p. 288)を形成することになる。〈実践的な意志の共同体〉を形成するためには出し手と受け手の間に「出会い」(ヴァイツゼッカー, 1995a, pp. 193-198)が生じなければならない。しかし、ここで意味する〈出会い〉は「物体と物体とが物理時空系のなかで合致するという出会い」ではない(金子, 2005b, p. 120)。パスを成功させるためには、出し手と受け手が目を合わせること(アイコンタクト)が重要であるとされる。ただし、ボール保持者が、味方がそこにいることを、もしくは味方が、ボール保持者がそこにいることを単に認識するだけではパスは成功しない。

ここで意味する出会いは、他なる自我が私の自我と合致する(フッサール, 2013, p. 398)ことである。たとえば敵陣ペナルティーエリア右側(攻撃方向に対して右側)で、受け手が敵のディフェンスラインの裏でボールをもらおうとし、出し手も受け手がボールをもらいたい場所を感じるとする。このような場合、出し手は「〇〇だったらあの場所でボールをもらおうだろう(もらえるだろう, もらおうとしているだろう)」と感じ、受け手は「△△だったらあの場所にボールを出すだろう(出せるだろう, 出してくれるだろう)」と感じているといえる。そして、受け手と出し手が「〇〇(ないし△△)だったら」と感じられるのは、「もし〈私〉が〈あなた〉だったら」といったように、〈私〉が〈あなた〉の立場に置き換えているからである。

このような、自己と他者とのつながりを「自己移入的連結」(フッサール, 1995)と呼ぶことができる。つまり、〈あなたの感じ〉を感じるため

に自己を〈あなた〉の身体に移し入れながら〈私〉と〈あなた〉を結びつけること、と理解することができる。そして、出し手と受け手がお互いに立場を入れ替えて、お互いの〈感じ〉を合致させることが、ここで意味する出会いなのである。したがって、換言すれば〈私〉と〈あなた〉の動感の合致が出会いということなのである。

〈実践的な意志の共同体〉において出会いは生じる。そして、その出会いのなかから誰にパスをするのが決断される。もちろん、どのような決断を下すのかは出し手が次の状況をどのように構成しているのかに依る。たとえば味方 A と味方 B がどちらもボールをもらおうとして動き、ボール保持者も両者の意図を感じているとする。この場合、「A にパスしたら〇〇になるだろう」、「B にパスしたら△△になるだろう」といったように、ボール保持者にはパスをした後の状況が予描されているはずである。さらに、予描された状況には結果も含まれる。つまり、「〇〇（ないし△△）になる」ということが結果ということである。この際に、出し手には「結果の先取」（ヴァイツェッカー、1995a, p. 226）が生じているのであり、ここで意味する〈結果の先取〉とは「パスをした後にどのような状況になるのかを感じられること」なのである。

当然、選手は良い結果を感じられた味方へパスをする。しかし、この結果は先取りされた結果であるため、「客観的時間形式で考えれば、まだ存在しないもの、それはそもそも存在しないもの」（ヴァイツェッカー、1995b）なのである。したがって、生じてくる事象は予期と一致せず外れることもある（ヴァイツェッカー、1995a, p. 232）。なぜなら、どのような状況であれ、予期にはそれが外れるということが本質的に属しているからである（フッサール、1997, p. 299）。

また、出し手は自ら受け手を選定する場合もあれば、味方に「触発」（フッサール、1997, pp. 215-218）されて受け手を決める場合もある。たとえば、味方が敵のディフェンスラインの裏へ走り出し、その味方の行動からより良い状況が構成され、その味方にパスを出せば好機を演出できる

と感じた場合、出し手はその味方を受け手として決めることになる。ここで意味する触発は「意識された対象が自我に働きかけるある特有な動向」（フッサール、1997, p. 215）として理解される。つまりここでは、「俺にパスをしろ」といったような味方の働きかけによって、ボール保持者がその味方を受け手とすることである。もちろん、これはそのような発声がかきかけになることもあれば、その際の行動や雰囲気がかきかけとなって触発されることもある。

パスを実現させるためには、〈実践的な意志の共同体〉から出し手と受け手の関係を形成する必要がある。そして、出し手と受け手は、何をしたいのか、何をしようとしているのか、何ができるのか、といったことを、お互いに感じ合う必要がある。すなわち、動感の合致が必要になる。さらに、誰にパスをするのかは、結果の先取りによって導かれるのである。

(4) パスコースを見つけ出せる能力

パスコースは「〈出し手と受け手となり得る味方を結んだ見えない線〉」（寺田・佐野、2015, p. 38）、あるいは「出し手と受け手を結んだボールが通過する道筋」と定義することができる。ただし当然ではあるが、パスコースは実体としては存在しない。したがって、パスコースがどこにあるのかわかる人にはわかるし、わからない人にはわからないのである。

上記のパスコースの定義に基づくと、出し手と受け手の間にパスコースが存在していることになるであろう。たしかに、試合中に敵のパスを未然に防ぐ場合、たとえばボールを保持する敵 A と受け手となり得る敵 B の間に位置することによってパスをさせないようにする。パスを未然に防ぐ場合、選手は出し手と受け手の 2 者間をボールが通過することがわかっているからそこに位置することができるのである。また、2 人組となり、向かい合ってパスをする練習、いわゆる対面パスでは 2 者間をボールが通過し続けるため、この間にパスコースができることになる。したがって、出し手と受け手の間にパスコースが存在す

ることは確実である。ただし、出し手と受け手の2者間の直線的かつ最短距離だけがパスコースということではない。それゆえ、出し手にとっては受け手の居場所がわかることが、パスコースがわかることにはならない。

たとえば出し手と受け手の間に敵が位置しているとする。この場合、出し手と受け手を結んだ直線的かつ最短距離だけがパスコースであるとするならば、パスコースは存在しないことになる。しかし、実際には敵の頭上を越すパスの可能性もある。また、サイドからセンターリングを上げる場合、敵がセンターリングを阻止しようと近寄って来たとしても、ボールに回転をかけることによって近寄って来た敵にボールを当てることなくゴール前にいる味方にボールをつなぐことができる。もちろん、そこを通過させるためのボールの蹴り方が身につけていなければならない。したがって、どこにパスコースを見つけ出すことができるのかは、どのような蹴り方でボールを蹴ることができるのか、そしてどこまで遠くに、どのくらい精確にボールを蹴ることができるのか、といったいわばボールを蹴る能力とも関係している。

さらに、出し手と受け手の間に敵がいたとしても、受け手が前後左右に動くことによって、あるいはボール保持者がドリブルをすることによって新たなパスコースを創り出すこともできる。もちろん、パスを受ける場合には、受け手が動くことによってパスを受けることができるようになるし、パスをする場合も、出し手が動くことによってパスをすることができるようになる。この場合、受け手も出し手もどこに動けばパスが通るのかがわかっているということである。つまり、動くことによってどこにパスコースができるのかわかっているということである。この場合、出し手ないし受け手はどのように動くのか、どこでボールをもらおうとしているのか、といったことをお互いに感じ合う必要がある。出し手も受け手も動く可能性を考慮すると、その瞬間を静止画のように一面的に捉えてパスコースの有無を決めることはできないのである。

以上のように、パスコースはその状況に存在す

る。ただし、パスによってより良い状況を創るためには、パスをした場合にどのような状況になるのかを構成する必要がある。そして、構成された状況が実現するようにパスをする。この際に、パスコースは主体が構成した状況に存在する。そのため、たとえば指導者が「あそこのパスコースは見えたか」といった問いかけをした際に、選手は「見えませんでした」と答えるといったことが生じるのである。この場合、指導者の構成した状況にはそのパスコースが存在し、選手が構成した状況にはパスコースが存在しないということになる。その状況から、どれくらいパスコースを見つけ出せるのかは主体の能力に依るのである。

出し手は受け手の居場所がわかるだけではなく、敵の居場所とボールを蹴る能力の関係、ならびに出し手と受け手の関係からパスコースを導き出すことができる。もちろん、状況によってはその瞬間にパスコースを1つしか見つけられない場合もあれば、その瞬間にパスコースを複数見つけられる場合もある。その瞬間に、どれくらいパスコースを見つけ出すことができるのかは状況ならびに身体的経験と関わっている。他者関係系において自己の居場所をどのように感じるのか（寺田・佐野，2015，pp. 37-38）、これまでに、どんなパスコースにどれくらいボールを通すことができてきたのか、といったことに依るのである。

(5) 状況に適した蹴り方でボールを蹴る能力

試合状況が千変万化するため、選手は「できる限りその場のプレーにふさわしい性質のボールが蹴れるように上達しなくてはならない」（多和ほか編，1997，p. 53）。したがって、パスを取り上げる際には、当然、ボールを蹴る能力の問題を排除することはできない。ただし本研究では、情況投射化作用の問題圏が取り上げられるため、情況との関わりに応じてどのような蹴り方でボールを蹴るのかを取り上げることになる。

選手は多様な蹴り方を習得し、自在にボールを蹴ることができるようになる必要がある。ただし試合では、状況に応じてボールを蹴る必要がある。たとえば右サイドからセンターリングを上げ

る場合、直線的な軌道のボールでは味方につながらないとしても、曲線的な軌道のボールならば味方につながることもある。この場合、選手はその状況に適した蹴り方でボールを蹴る必要がある。もちろん、曲線的な軌道のボールを蹴るためには、その蹴り方が身につけていることが前提になる。

選手が複数の蹴り方を身につけている場合、その選手はボールを蹴る際に「どのような蹴り方でボールを蹴るか」といった決断に迫られることになる。フリーキックのように、一見自分の思ったようにボールを蹴ることができるような状況でさえ、どのような蹴り方でボールを蹴ることが適切なのかはその状況に関係づけられているといえる。壁となる選手の身長やその選手がジャンプするの否かといったことを無視することはできないからである。サッカーでは、一見ボール保持者の蹴りたいようにボールは蹴られているように見える。しかし実際には、状況との関わりに応じて、ボール保持者は「どのような蹴り方でボールを蹴ることが適切なのか」という決断に迫られているといえるのである。

たとえばコーナーキックの場合、選手はインステップキック、インフロントキック、さらに近くに味方が寄って来ればインサイドキックによってボールを蹴っても良い。この状況ではこのようにプレーしなければならぬといったような正解はないように、その状況に適した蹴り方にも正解はないといえるのである。

どのようにボールを蹴るかはボール保持者の決断である以上、そこにはボール保持者の意志が反映される。ただし、どのような蹴り方でボールを蹴るべきなのかは状況に方向づけられているといえるべきであろう。状況に方向づけられているというのは、その状況がある蹴り方へと向かわせている、と言い換えることができる。たとえば上述したコーナーキックの場合、インステップキック、インフロントキック、インサイドキックがあげられたが、コーナーキックという状況が、これらの蹴り方でボールを蹴るようにボール保持者を方向づけているということである。

そうになると、選手は〈今・ここ〉がどのような状況なのかを把握する必要がある。そのため、当然、どのようなボールを蹴るかの決断には状況把握能力や次の状況を構成する能力なども関わっている。ただし、選手は漠然と〈今・ここ〉の状況を把握しているわけではない。「事実的な経験世界は類型化されて経験される」（フッサール、1977）のであり、経験の特殊な状況は類型的情況（メルロ＝ポンティ、1964, p. 188）として把握されるといえるのである。

たとえば、敵に攻め込まれている状況において、失点の危険を一時的に回避するためにクリアをする場合、自陣ゴールからより遠くへボールを蹴る必要がある。そのため、敵がプレッシャーをかけてこないのであればインステップキックによって、自陣のゴールからより遠くへボールを蹴ることが良いといえる。しかし、敵がプレッシャーをかけてきている状況において、インステップキックでボールを蹴ろうとして、もしキックミスをしてしまえば失点の危険性が高まってしまう。そのため、敵がプレッシャーをかけてきている場合には、より遠くへボールを蹴るということよりも、その場所からボールを違う場所に移動させることを優先することが良いといえる。この場合、インサイドキックでボールを蹴ることによってタッチラインの外にボールを出すことができれば、とりあえず危険を回避することができる。また、弾んでいるボールが向かってきた場合には、インサイドキックによって足をボールに当てることを優先させることが良いといえる。

選手はその状況に適した蹴り方でボールを蹴ることによって、より良い状況を創り出す必要がある。そのためには、類型的情況との関係から、どのような蹴り方が良いかを決断する必要がある。このように、選手は状況と関わりながらどのような蹴り方が適切なのかを決断しているといえるのである。

V. 結 語

本研究では現象学的運動学の立場から地平分析

を行うことによって、〈パスの知〉を明らかにすることが試みられた。そして、サッカー選手の地平を分析することによって、サッカー選手に不可欠な根源的な〈知〉として他者の〈知〉を感じる能力、自己の〈知〉を感じる能力の存在が明らかにされた。また、パスを実現させる固有な〈知〉として、次の状況を構成する能力、パスをすることが効果的であると感ずる能力、味方を受け手として感ずる能力、パスコースを見つけ出せる能力、状況に適した蹴り方でボールを蹴る能力の存在が明らかにされた。

本研究で明らかにされた能力は、現場の指導者にとって極めてなじみのある能力であるといえる。なぜなら、本研究で明らかにされた能力をどのように呼ぶのかという名称の問題はあるものの、指導者は選手のパスを洗練させるために、本研究で能力と呼んでいる現象に対して働きかけているはずであるからである。ただし、地平分析を行ったことによって、本研究で明らかにされた能力を、サッカー選手がパスをする際に必要不可欠な能力として位置づけることができるようになったと考えられる。

サッカーにおけるパス指導をより充実させるためには、今後、〈パスの知〉の視点からパス指導を行うことによって、どのように選手のパスが洗練されていくのかを明らかにする必要があるといえる。しかし、そのような研究は今後の課題となる。

文 献

朝岡正雄 (1991) 人間科学の方法と運動研究. スポーツ運動学研究, 4: 1-12.
 ボイテンディク: 濱中淑彦訳 (1995) 人間と動物 (新装版). みすず書房.
 チャナディ: 宮川毅訳 (1994) —新版—チャナディのサッカー. ベースボールマガジン社.
 遠藤卓郎 (1979) 現象学の体育学研究への有効性について. 体育・スポーツ哲学研究, 1: 129-137.
 日高敏隆 (2005) 訳者あとがき. エクスケル・クリサート: 日高敏隆・羽田節子訳, 生物から見た世界. 岩波書店, pp. 159-166.
 フッサール: 長谷川宏訳 (1977) 経験と判断 (再版).

河出書房新社, p. 319.
 フッサール: 渡辺二郎訳 (1979) イデーニ I-I. みすず書房, pp. 196-202.
 フッサール: 渡辺二郎訳 (1984) イデーニ I-II. みすず書房, p. 46.
 フッサール: 細谷恒夫・木田元訳 (1995) ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学. 中央公論社, p. 499.
 フッサール: 山口一郎・田村京子訳 (1997) 受動的総合の分析. 国文社.
 フッサール: 浜渦辰二訳 (2001) デカルト的省察. 岩波書店.
 フッサール: 立松弘孝・榊原哲也共訳 (2009) イデーニ II-II. みすず書房.
 フッサール: 浜渦辰二・山口一郎監訳 (2012) 間主観性の現象学 その方法. 筑摩書房, p. 498.
 フッサール: 浜渦辰二・山口一郎監訳 (2013) 間主観性の現象学 II その展開. 筑摩書房.
 フッサール: 浜渦辰二・山口一郎監訳 (2015) 間主観性の現象学 III その行方. 筑摩書房, p. 67.
 金子明友 (1994) 訳者注. マイネル: 金子明友訳, スポーツ運動学. 大修館書店, pp. 425-476.
 金子明友 (2002) わぎの伝承. 明和出版.
 金子明友 (2005a) 身体知の形成 (上). 明和出版.
 金子明友 (2005b) 身体知の形成 (下). 明和出版.
 金子明友 (2007) 身体知の構造. 明和出版.
 金子明友 (2009) スポーツ運動学. 明和出版.
 金子明友 (2015) 運動感覚の深層. 明和出版.
 加藤泰樹 (1981) ボイテンディクの運動空間と運動時間について—機能運動学全体を想定している方法的基礎の解明(そのII)—. 体育・スポーツ哲学研究, 3: 25-40.
 川瀬雅也 (2010) I 経験の構造. 経験のアルケオロジー. 勁草書房, pp. 2-3.
 岸野雄三 (1980) II章 スポーツ科学とは何か. 朝比奈一男ほか編著, スポーツの科学的原理 (第4版). 大修館書店, pp. 77-133.
 隈元忠敬 (2007) 序文. 石田三千雄著, フッサール相互主観性の研究. ナカニシヤ出版, pp. iii-v.
 メルロ＝ポンティ: 滝浦静雄・木田元訳 (1964) 行動の構造. みすず書房.
 メルロ＝ポンティ: 滝浦静雄・木田元共訳 (1966) 眼と精神. みすず書房, p. 137.
 メルロ＝ポンティ: 竹内芳郎・小木貞孝 (1967) 知覚の現象学 1. みすず書房, p. 232.
 マイネル: 金子明友訳 (1994) スポーツ運動学 (第8版). 大修館書店, pp. 401-403.
 西研 (2015) 第3章 人間科学と本質観取. 小林隆児・

- 西研編著, 人間科学におけるエヴィデンスとは何か. 新曜社, pp. 119-185.
- 大淵正雄ほか編 (1976) 最新・サッカー指導法教本. 日本体育社, p. 8.
- ルイス: 高司裕也訳 (2015) 世界最高のサッカー指導書 パルセロナ トレーニングメソッド. KANZEN, p. 231.
- 佐野 淳 (1997) キネゲネシスの知. スポーツモルフォロジー研究, 3: 51-64.
- 佐野 淳 (2014) 発生運動学の方法論の反実証主義的性格. 筑波大学体育系紀要, 37: 41-52.
- 田口 茂 (2014) 第一章 「確かである」とはどういうことか?—「あたりまえ」への問い. 現象学という思考. 筑摩書房, pp. 29-59.
- 高岡美郎 (1976) 自然科学概論. 東京教学社.
- 谷 徹 (2002) これが現象学だ. 講談社.
- 多和健雄・長沼 健・永嶋正俊・長池 実・鈴木嘉三・畑山正編 (1997) サッカーのコーチング (14版). 大修館書店.
- 寺田進志・佐野 淳 (2015) パス発生における出し手の体感身体知の分析. スポーツ運動学研究, 28: 31-53.
- ヴァルデンフェルス: 山口一郎・鷺田清一監訳 (2004) 講義・身体の現象学—身体という自己—. 知泉書館, p. 310.
- ヴァイツゼッカー: 木村 敏・濱中淑彦訳 (1995a) ゲシュタルトクライス (新装版). みすず書房.
- ヴァイツゼッカー: 木村 敏訳 (1995b) 生命と主体. 人文書院, p. 69.
- ヴァイツゼッカー: 木村 敏訳 (2010) パトゾフィー. みすず書房.
- ワロン: 浜田寿美男訳編 (1983) 身体・自我・社会. ミネルヴァ書房, p. 27.
- 山口一郎 (2002) 現象学ことはじめ. 日本評論社.
- 山口一郎 (2009) 12 幼児期の「生得的汝」との関係と成人の「我汝関係」. 実存と現象学の哲学. 放送大学教育振興会, pp. 149-161.
- ザハヴィ: 工藤和男・中村拓也訳 (2003) 第3章 後期フッサル. フッサルの現象学. 晃洋書房, pp. 119-212.

(2016年8月3日受付)
(2017年3月29日受理)

Advance Publication by J-STAGE
Published online 2017/5/2